

江天こうてんの暮雪ぼせつ

叙しゃく 龍りゅう 沢たく

江天暮こうてん欲ほつと雪霏霏ゆきひひたり

釣つり罷や誰たが舟ふね釣磯ちゆうきに傍そば

沙鳥さちよう飛とばず人見ひとみえず

遠村えんそん只ただ一蓑いっさの帰かえる有あり

【作者】釈龍沢(一四二二〜一五〇〇年)室町・戦国時代の僧。臨濟(りんざい)宗。京都建仁寺の宝洲宗衆らに師事。天柱竜濟の法を

つぐ。真如寺・建仁寺・南禅寺の住持。赤松政則の帰依(きえ)をうけ三条西実隆ともしたしかった。詩集に「黙雲詩藁」編著に

「錦繡段(きんしゅうだん)」など。七十九歳。播磨(はりま)(兵庫県)出身。別号に黙雲。

【語釈】*江天暮雪:川辺の夕方の雪模様。 *暮:日暮れ。名詞。 *江天:川の上の空。 *霏霏:雨や雪などが、甚だし

く降るさま。 *釣磯:釣り場の川原。釣り場の川の水が当たる岩石。 *一蓑:蓑(みの)を着けた人の姿ひとつ。

【通釈】川の上の空模様は暮かけて、雪が、しきりに降りそそいでいる。魚を釣ることをやめて、誰が乗った小舟なのか、釣り場の川の水が当たる岩石のそばに寄り添っている。砂州に棲む水鳥は、降りしきる雪のために飛び立とうとしないし、人の姿も見えな

くなってしまうが。遠くの村里で、ただ蓑(みの)を着けた人の姿ひとつ自宅に帰って行くのが見えるだけだ。